

鈴木はヤナギ類とササ類については特に関心が深く、大沼郡金山町太郎布で変ったヤナギを見つけ、それを白河に栽培し開花したものを木村有香に送り、*Salix* × *shirakawensis* Kimura (1937) と命名された。あとで西白河郡古関村（現、表郷村）でそれと同じものが見つかったことから和名はコセキヤナギとなった。また、ササの研究中西白河郡西郷村馬立（現、新甲子温泉）で、それより東の太平洋側にミヤコザサ節、それより西の内陸にチマキザサ節というようにササの系統が変わることに気がついた。それがきっかけとなって、長男貞雄とともに馬立から北と南へ、ミヤコザサ節とチマキザサ節の入れかわる地点を調査し、ついに青森県から上越国境の浅間山までの間のミヤコザサ線を発見した（あとでその線は南は山口県まで、北は北海道根室まで続いていることがわかった）。鈴木が福島県で発見したササの新種は15種にのぼるが、鈴木貞雄によって多くのものが他種に統合され、次の4つが種または変種に残された。カワウチザサ *Sasa suzukii* Nakai (1935), アサカネマガリ *S. subvillosa* S. Suzuki (1964), ヨモギダゴチク *Arundinaria amoena* Nakai (1934) → *Sasaella masamuneana* (Makino) Hatsushima et. Muroi var. *amoena* (Nakai) S. Suzuki (1976), ケスエコザサ *Arundinaria kanayamensis* Nakai (1934) → *Sasaella leucorhoda* (Koidzumi) S. Suzuki var. *kanayamensis* (Nakai) S. Suzuki (1976)。鈴木足跡は県内各地に及ばないところなく、後に小林勝と共著で「福島県植物誌」を著した。

猪苗代町在住の長尾景蔵は、猪苗代湖天神浜に打ちあげられている球形のコケ塊を福島県天然記念物調査員であった斎藤知賢に届けた。斎藤は三好学に送り、三好はこれをマリゴケと称し、検名のためオランダの Verdoorn に送り、さらにイギリスの Dixon に転送された。これは *Dicranella squarrosa* (Stark.) Schimp. の一変形で、f. *submersa* Dixon (1934) とされ、ミズスギゴケと呼ぶことにした。1935年天然記念物に指定された。高橋源三は1936年猪苗代湖畔を採集し、「猪苗代ニ産スル毬苔ノ発見並ニ其成因ニ就テ」を発表し、前記マリゴケには *Anisothecium squarrosus* (Stark) Lindb. f. *submersa* (Dix.) Sakurai et G. Takahashi, また新に発見したマリタイに *Aplozia nipponica* Sakurai et G. Takahashi イナワシロウロコゴケ, f. *globosa* Sakurai et G. Takahashi タマウロコゴケと命名した（現在はヒロハツボミゴケに統合されている）。

桜井久一は1912年尾瀬地域を、1929年には磐梯山付近を採集した。桜井の尾瀬採品で、*Scapania atrata* Warnst., *S. oseensis* Warnst., *S. spathulatifolia* Warnst., *S. undulata* Dum. var. *subdenticulata* Warnst., *Chiloscyphus submersus* Warnst. が Warnstorff によって記載された。また桜井の採品によって Reimers は1931年に尾瀬産蘚類を18種あげている。